

糖尿病医会 20 周年を記念して

糖尿病医会は平成 14 年（2002 年）に設立され、新型コロナウイルスパンデミック真只中の 2022 年に設立 20 周年を迎えました。20 周年には少し遅れましたが、これまでの歩みを記憶にとどめておきたいという機運が高まり、これまでご尽力いただいた先生方にご寄稿をお願いしたところ、多くの先生方から玉稿を頂戴することができました。ご協力いただきました先生方には厚く御礼申し上げます。

頂きました原稿は編集者の独断で、初代会長の土井先生から 4 代目会長の長谷川先生までを会長の歴任順、それ以外の先生方はあいうえお順で並べさせていただきました。

また、この公開分に間に合わなかった先生方からのご寄稿も引き続き歓迎いたしますので、事務局または鍵本までお送りいただけますと幸いです。

編集責任：鍵本伸二

目次

京都糖尿病医会の創生期と未来（土井邦紘）	4
京都糖尿病医会の講演会に対する姿勢が評価されています（和田成雄）	9
糖尿病医会とコロナ禍（鍵本伸二）	12
京都糖尿病医会 20 周年に思う～あの頃、そして現在～（長谷川剛二）	15
京都糖尿病医会とともに 20 年（稲垣暢也）	17
京都糖尿病医会 20 周年に寄せて（大石まり子）	19
つながりを感じて（小倉雅仁）	21
京都糖尿病医会設立 20 周年を記念して（梶山静夫）	23
京都糖尿病医会（Kyoto Diabetes Society）の思い出（島津 章）	25
京都糖尿病医会 20 周年おめでとうございます（高木 力）	27
感謝を込めて（近山 達）	29
地域医療と共に：京都糖尿病医会での経験（土居健太郎）	32
京都糖尿病医会 20 周年誌に寄せて（長嶋一昭）	33

京都糖尿病医会 20 周年おめでとうございます (松村理司)	34
糖尿病を取り巻く環境の変化を感じた 20 年 (山崎真裕)	37
京都糖尿病医会と私 (山本泰三)	39
糖尿病医会の 20 年に関わらせていただいて。(米田紘子)	42

京都糖尿病医会の創生期と未来

土井内科 土井 邦紘

京都糖尿病医会が設立 20 周年を迎えるにあたりまして一言お祝いを申し上げます。

私が神戸大学を辞して、ここ京都府宇治市に開業したのが平成 4 年（1992 年）の 8 月 3 日である。7 月 31 日は神戸大学付属病院で最後の外来を行い、患者さんに別れを告げた。まだ片付かない私の部屋の整理を技官にお願いして、誰も居なくなった大学の私がいた研究室を後にした。長年過ごした病院であり、今日が最後かと思うと一抹の寂しさがこみ上げた。

開業したものの、私には知らない土地であり、患者さんの数はまばらであった。そこで、これまで、勉強する機会が少なかった糖尿病以外の分野に顔を出す時間ができた。何もかも新鮮であった。呼吸器科、循環器科、皮膚科、消化器科などの講演会は勿論のこと、近隣の病院が開催される研究会や時には厚かましく、自分が送った患者さんの手術にまで立ち会わせて頂いた。今は、体力的に無理となったが、懐かしい思い出である。その内に、研究会の帰り道、数人の先生方から話が持ちかけられることがあった。其の急先鋒と言える先生が今は亡き入野純一先生であった。先生行きつけの祇園でうどんをすすりながら話を切り出された。「土井先生、京都に糖尿病医会を設立しようや」という言葉であった。「鴨川に渡し船を作ろう」ということでもあった。この祇園の家は 70 歳ぐらいのおばさんが置き屋をしており、入野先生はここで、静かにアルコールを楽しんだり、時にうどんや食事をしてヒト寝入りする安住の場所とか、誰にも邪魔されないのが心地よいということであった。そんなある日、家に呼ばれて、もう少し話を具体的にしようということになった。私もその頃、糖尿病は血糖のコントロールのみでなく、動脈硬化症をはじめとした合併症の予防、治療も必要であり、名前は糖尿病医会でも「生活習慣病」を含める、すなわち病診連携も視野に入れて糖

尿病に興味をもつ一般開業医から、大病院、大学まで広く会員を募集し、かつ、循環器、腎臓、透析、眼科、神経科などの専門医も加入してもらう必要性を感じていたので、これを力説した。さらに、海外では見られる製薬会社の研究者、開発者にも参加できる道を開いてはと提案したが、皆さん、驚かれたようであったが、某先生から即座に反対された。そこで、既存の糖尿病研究会が幾つかすでにあり、競合しないように心配りをした。

それなら、どのような研究会が望ましいか、色々と思いついたが、ふっと、医師になってから最初に講演会を兵庫県某医師会から依頼された時の光景が頭をよぎった。初めて受諾した講演であり、自分達のデータを詳細に吟味してまとめたスライドを作成した。神戸大学の助手（現在の助教）になって間もないころであり（1971年）、超多忙を極めていた。講演を終え帰宅の段になって、講演を依頼して下さった医師会の先生方は蜘蛛の子を散らすように会場を出られた。後に残ったのは製薬会社の人達で、労をねぎらうとともに謝礼を頂いた。私は驚いた。当然、謝礼は主催された医師会から頂くものとばかり思っていたからであった。しばらくして、其の地区の医師会の副会長が戻ってこられ、寿屋へ連れて行って頂いた。その際に、「医師会の先生方も先生の講演に感謝しておられたよ」と言われた。講演会も多く、現在の医師会費ではこれを賄いきれないと言われたことを思い出した。

学術講演会は自分達のためのものであり、少し工夫をして出来ることから、自分達の学術講演会あるいは研究会に何とかしようという企画（案）である。私に声をかけられた先生や賛同して頂いた先生方はほぼ同じ意見であった。それでは、ということで、具体的に動くことにした。故入野先生のお知恵を拝借しながら、故福井巖、故榊田 博、金綱隆弘、中川竹彦・・・先生方に相談して、オール京都で構成しようということになった。しかし、設立にあたっては京大と府立医科大学の参画がないと初期の目的は果たせないということになり、その

仲介役を任されることになった。ある少し寒い日であったが京都大学旧産婦人科病棟に陣を構えておられた清野 裕教授を尋ねた。先生とは神戸大学時代からの知り合いであり、私がお願いする役目を請け負った。これまでの経緯を説明すると「なかなかいい話だが京都は少し難しいこともあるが、まずやってみて下さい」ということであった。了解されたものとして以後、府立医大の糖尿病チームリーダーである中村直登講師（後の教授）、さらには京都大学第二内科の糖尿病チームリーダーであり、当時京都医療センター院長に就任されていた葛谷英嗣先生に相談した。いずれも快諾が得られたので、この会の今後の存続も考慮して京都府医師会の専門部会の一つに加えて頂けるように申請した。この間、京都糖尿病医会設立趣意書を持って発起人となって下さる先生方を仲間の先生方が仲間の先生方に次々と当たって下さった。その結果は予期しないほどの反響であり、多くの先生方が待ち望んでおられたという感触であった。当時、「糖尿病科」という標榜はまだ政府からは許可されておらず、京都府医師会理事会ではその理由のために許可されなかった。そこで、発起人が予想以上に多く集まったので、発起人会をすることにした。創設のための発起人会が平成13年（2001年）9月17日に開催された。清野教授をはじめお歴々が森本昌親先生、梶田出先生の御好意でお借りした京都専売公社（後の東山武田病院、現在；ホテル建物）の会議室に集合した。驚いたことに森本昌親、和田成雄、大石まり子先生他34名という多くの専門医の方々に集まっていたことが出来た。

発起人会ではこれまでの運動の経緯と準備した発起人名簿、会則（案）を私が提示し会則を一部訂正の後承認された。そこで、会独自の姿勢を堅持することを基本に年間の学術集会のあり方について喧々諤々の意見交換があり、少し殺気立った感じがした。それだけ集まってきた先生方はこの会の発足を長い間渴望していたのであろう。色々な意見が出されたが、最後に清野教授からこの会は出来るだけ「自前でやること」という注文がなされた。「京都

糖尿病医会」と銘々の後、今回の発起人が「当会の理事」と決定されたので、そこから理事会となり、会長選挙となった。そして、私、土井邦紘が初代の会長に選出された。

直ちに創設記念講演会の構想が練られ、同時に同じ会として発足するなら、京都府医師会の分科会として活動は出来ないかと提案した。幸い本会の賛同者に京都府医師会の理事の先生もあり、強力に推薦することが確約された。府医の理事会では当時「糖尿病」は正式に認められた標榜科ではないという理由から2回見送られたが、平成14年（2002年）1月19日付で京都府医師会 故横田 耕三会長あてに再度申請した。その結果、平成14年2月7日の理事会で「糖尿病は生活習慣病の柱であり、一般開業医のみでなく各診療科の先生が加入されていることを踏まえて承認する」という返事を頂いた。承認書には専門医会としての発足は平成14年4月1日以降となっていた。此の理事会の承認には当時の府医の理事であった故安達秀樹現副会長、上原春男監事の多大なご協力、ご支援があったことを申し添えておきたい。そして、平成14年3月23日には「京都糖尿病医会創設記念講演会」を京都タワーホテルにて、平成14年6月8日には「第1回京都糖尿病医会総会および講演会」をばるるプラザ京都にてそれぞれ開催した。

こうして、京都糖尿病医会はスタートした。以後、20年間が経過して会員数も増加して270名を超える大所帯となった。学術講演会は毎回、一工夫も二工夫もして、今、会員がどんな内容の学術講演会を望んでいるのか吟味しながら演者も日本各地から広く選出し、出来るだけ多くの時間をデイスカッションに割いている。これは、製薬会社と共催して時も、プログラムのキャッチフレーズから内容、演者に至るまで、検討している。この姿勢のためか、参加者も毎回多く、参加してよかったと寄せられる先生方が増えていることは、今後の本会の発展が期待されるところでもある。お陰さまで、後任の会長和田成雄、鍵本伸二、先生と現長谷川剛二会長のご尽力により、現在もなお、会員数が増加している活気のある「京都糖

尿病医会」である。

さて、これからの20年京都糖尿病医会あるいは医学会はどのような道を歩くべきか？多くの先生方が考えておられると思うが、世界はAIの時代であり、生物界の探求もマイクロからナノの時代となりつつある。生命科学の追及が細胞レベルから小胞体内まで進み、種々のタンパクが、それぞれ規則正しい一定の役割を果たしていることが徐々に明らかにされつつある。当然、その後の研究は病態解明に研究は進み、治療法につながるであろう。コンピューター解析が進歩（量子）するとともに複雑なプログラミンが必要とはなるが、膨大な科学の集積は誰もが理解し、応用することは困難である。しかし、将来的な期待ではあるが、一部の研究者の手によって簡素化され、誰でも使うことが出来る時代となることが予測される。したがって、その分野の一端を担う、医療界に限っても、多方面の専門分野に分かれ、AIを利用して人類の疾病に立ち向かうことになる。それであっても、人間とは何か、生命とは何か、それらを背景とした疾病への探求から導き出された治療法を、刻々と進歩する診療の手法を我々は如何に帰納すべきか考えなくてはならない。多くの研究成果を「人間」に直接手を下して還元する立場にあるのは、現行の制度では医師である我々である。生物、物理、化学など科学が進歩すればするほど「人間とは何か」の原点に絶えず振り返って考察する必要がある。「人間」を対象とする医学は科学が如何に進んでも、「人の心」「人の体」を無視はできない、高い倫理観が医師にはますます要求されるであろう。

京都糖尿病医会の講演会に対する姿勢が評価されています

和田内科医院 和田成雄

京都糖尿病医会設立 20 周年、おめでとうございます。早いものですね。

設立当初より会員であったものとして、大変印象深く、また誇らしく思っていることがあり、記させていただきます。

平成 21 年に論文化された「京都ハート研究」は、製薬会社元社員が論文作成に不正に関与したことで、薬事法違反疑いで逮捕、起訴されるという大事件となりました。そこで、平成 26 年 6 月 28 日に開催された第 25 回京都糖尿病医会学術講演会に、この事件を厳しく批判されていました桑島 巖先生（臨床研究適正評価教育機構（J-CLEAR）理事長）を講師としてお招きし、「高血圧治療と臨床研究 – その適正な見方と考え方」の講演をして頂きました。

講演会終了後の懇親の場で、「京都糖尿病医会では製薬メーカーに依存せず、独自で講演会を企画・開催している」という我々の考えを話しました所、大きく共感して頂き、その後、桑島先生のご協力を得て、マスコミ、学会、講演会などを通じて本会の趣旨を述べる事が出来ました。

1. 平成 26 年 11 月 3 日読売新聞全国版：「医師講演会 年 16 万回。最新情報現場に提供。薬の宣伝合戦指摘も」との見出しで製薬企業主導の講演会の実態が大きく取り上げられました（写真）。「新薬が出る度に企業が巨額を投じ、医師向け勉強会という名目の宣伝合戦になっている。結果として高価な新薬の処方が増え、国民の医療費を押し上げている。」との指摘を掲載。講演会の実態（ホテルで開催、立食パーティー付き、タクシーチケットなど）や公開された講師謝金など、一般人には到底理解不能な内容が書

かかれていました。そして、我々、京都糖尿病医会の活動が紹介されています。「京都で開業する医師は、同じ講師がA社の講演会ではA社の薬を持ち上げ、B社の講演会ではB社の薬を勧めていて、一体何が正しいのか、わからないこともある。と首をかしげる。」「同医会では学術講演会や地域単位の学習会など、手弁当の医師向け勉強会を年に4回開く。薬の利点だけでなく、危険性を知ることが大切。との考えで、テーマや講師は会員の話し合いで決める。企業と共催する場合もテーマや講師は自分たちで選ぶ。」と我々の基本的考え方と活動内容を紹介し、記事の締めくくりに私の言葉を掲載してくれました。「手間はかかるが、医療に必要な情報を正しく得るには、製薬企業頼りではなく、医師側の努力が欠かせない。」と。

2. 生成29年5月13日 J-CLEAR研究会「スポンサーなしの研究会・講演会の試み」(東京大学病院会議室)：京都糖尿病医会の情報発信などに関する趣意を發表しましたが、多くの参加者の賛同を得、終了後には読売新聞社、時事新報社など数社の質問を受け、名刺交換をして来ました。後日、読売新聞社から取材がありました。

3. 令和5年9月9日第71回 日本心臓病学会学術集会シンポジウム「学術講演会における企業による事前スライドチェックを巡って」「一 医療現場が求めているもの 一」(新宿京王プラザ)：京都糖尿病医会の講演会への取り組みに関する報告を依頼されました。講演内容は従前と余り変わりませんが、今回は、そのメリット、デメリットに関し、次の如く報告しました。

メリット：①テーマを自由に選べる。②そのテーマに関して最適任と考えられる講師をお迎えできる。③演者の本音を聴く(訊く)ことが出来る。④結果として、清濁併せて正しい情報を得ることが出来る

デメリット：①研究会の立案、会場設定、演者との交渉など、自分たちでやらなければな

らない。②参加者数の予測が難しい。③講師ご自身に交通手配を依頼するなど、多大なご迷惑をお掛けしている。④講師に十分な謝礼など、きめ細かいおもてなしが出来ていない。

会場は満席で、多くの方々が興味を有しておられることが、良く分かりました。

お陰様で京都糖尿病医会が関与する講演会は常に好評を博し、我々の考え方が多くの先生方に認知されてきたと自負しております。

医師講演会 年16万回

製薬65社 謝礼支払い

講師謝金の多い医師

所属	提供企業	講演件数	各社金額
私立大特任教授 (糖尿病・内分泌)	武田	65	1306万円
	ノバルティス	49	816
	サノフィ	32	480
国立大教授 (循環器内科)	武田	9	200
	第一三共	36	595
	MSD	21	350
私立大教授 (整形外科・リウマチ科)	武田	18	295
	第一三共	64	1074
	MSD	13	211
国立大教授 (遺伝子治療学)	ノバルティス	32	665
	MSD	10	222
	第一三共	14	311
クリニック院長 (循環器内科)	武田	62	682
	ノバルティス	43	499
	第一三共	24	512
国立大教授 (生体機能薬理学)	武田	21	439
	ノバルティス	10	205
	ファイザー	36	595
医学研究所長 (循環器)	田辺三菱	18	300
	第一三共	14	228
	ノバルティス	50	829
私立大教授(内科)	サノフィ	15	225
	エーザイ	30	1044
市民病院センター長 (循環器内科)	武田	28	601
	第一三共	21	439
	ノバルティス	37	487
医科大講師(内科)	田辺三菱	27	314
	MSD	19	211

「最新情報現場に提供」 「薬の宣伝合戦」指摘も

製薬企業65社が昨年度、医師を対象に開いた講演会は、昨年度より。現場の医師が最新の情報を得る貴重な機会だが、情報が偏ったものになれば、患者への処方にも悪影響を与えかねない。今年、個人に支払った講師謝金が初めて情報公開されたが、透明性をさらに高めていくことが求められる。(医療部 高橋圭史、原藤也、赤津良太、本文記者一面)

■立食パーティー
講演会は各分野のリーダーや地元有力大学教授など、講師は各分野のリーダーが選ばれていることが多い。国立大教授は、医師会と一緒に開くケースも多い。頼まれ、地域の医師のレベルを上げるためにやっていると語る。別の講師は「至る所の医師に情報を伝えるのが狙い」(第三共)と説明する。

講演会は主診現場のや地元の有力大学教授など、講師は各分野のリーダーが選ばれていることが多い。国立大教授は、医師会と一緒に開くケースも多い。頼まれ、地域の医師のレベルを上げるためにやっていると語る。別の講師は「至る所の医師に情報を伝えるのが狙い」(第三共)と説明する。

製薬上位10社の医師・医療機関への資金提供

2013年度分: 研究・開発費、講演会・説明会など、講師謝金など、寄付金など、接待費など

2012年度分: 研究・開発費、講演会・説明会など、講師謝金など、寄付金など、接待費など

米国進む情報公開

製薬企業は、不透明な資金提供で、薬の処方ゆがめられれば、患者にも悪影響が及ぼされた。世界医師会は2009年に「企業との関係はあらゆる状況で十分に公表されるべきだ」という声明を発表した。米国では医療保険改革法に基づき、物品を含め10%以上の利益提供は報告が義務付けられ、政府が今年からインターネットで公開する。世界中で情報公開が進む。

日本でも業界の自主公開が昨年から始まったが、情報の印刷がなかったり、一種で会社名が隠れてしまったりするなどの問題が指摘されている。一方、薬の価格入手が企業側に有利な現状を

医師へのべつべつ6人だっ

医師へのべつべつ6人だっ。年50回以上講演した医師が14人、謝金の合計1000万円を超えた医師も11人いた。155回講演で2800万円以上を得た医師もいた。65社全体は、謝金は計16万回だった。謝金は講演1回当たり10万円、講演2回以上は20万円が多かった。

産学連携が詳しい筑波大の野呂由紀子准教授は「講師謝金の情報公開は大きな一歩だ。企業と関係が深い医師の情報発信は、企業の意向を反映し偏る恐れがある。発言者と企業の関係をチェックする必要がある」と指摘する。

「同じ講師がA社の講演会ではB社の薬を上げる、B社の講演会ではB社の薬を薦めていて、一体何が正しいか、わからないこともある」と首をかしげる。

「同じ講師がA社の講演会ではB社の薬を上げる、B社の講演会ではB社の薬を薦めていて、一体何が正しいか、わからないこともある」と首をかしげる。

読売新聞が、売り上げ上位10社を調べたところ、昨年度は、日本高血圧学会の協賛で9000万円を超えた医師も890名、研究・開発費が890億円、7割増、超過費が250億円、4割以上減る中、講師謝金は10億円、10社で計7万2000万円、謝金は200万円以上の謝金を払った

読売新聞が、売り上げ上位10社を調べたところ、昨年度は、日本高血圧学会の協賛で9000万円を超えた医師も890名、研究・開発費が890億円、7割増、超過費が250億円、4割以上減る中、講師謝金は10億円、10社で計7万2000万円、謝金は200万円以上の謝金を払った

糖尿病医会とコロナ禍

医療法人健伸会かぎもとクリニック 鍵本 伸二

2001年の夏が終わり、9月に入って間もないころ、私が勤務していた賀茂病院に関西電力病院院長の清野先生から突然お電話をいただきました。「糖尿病医会というのができるらしいから、あんたも協力しなさい」

当時、医師会について何も知らなかった私は、医師会の傘下にある専門医会の存在も理解しておらず、ましてや「糖尿病医会」が日本で初めて組織されるという画期的な出来事であることなど知る由もありませんでした。しかし、大恩ある清野先生のお言葉に対しては「できる限り協力させていただきます」とお答えする以外にありません。

その背景には、発起人である土井先生や和田先生をはじめとする諸先輩方の多大なご尽力があり、設立の準備が進められていたことを後に知りました。「糖尿病専門医だけでなく、糖尿病にかかわる多くの先生方にご参加いただき、京都の糖尿病診療のレベルアップを目指す」「製薬会社の宣伝色を排し、会員が本当に聞きたいことを聞ける講演会を開催する」という設立理念を伺い、私は胸を躍らせながら2002年3月の設立記念講演会の日を迎えました。

私も発起人の末席に加えていただきましたが、初代会長の土井先生のカリスマ的な指導力と、事務局の和田先生の緻密な準備に引っ張られ、ただただついていくばかりでした。2006年11月に私自身も開業し、その直後から地区医師会の理事を仰せつかり、ようやく医師会やその活動について理解できるようになった気がします。

土井先生が3期9年間で会長を勇退され、2011年の総会で和田先生が会長に就任された際には、私が事務局を引き受けました。途中の2015年からは京都北医師会の会長に就いた

ため、事務局の仕事が至らないことも多々あり、和田会長にはご負担をおかけしたことと思います。

2017年からは和田先生の後を引き継ぎ、私が会長を務めることになりましたが、会長在任中に何より記憶に残っているのは新型コロナのパンデミックです。新型コロナが中国で始まったのは2019年末、日本で実際に影響を受け始めたのは2020年に入ってからでしたので、最初の2年半は通常通りに会務が進んでいました。

しかし2020年春には対面での会合が一切開催できず、糖尿病医会の理事会や総会も中止となりました。会則上、会長の任期は3年で、2020年の理事会・総会では改選が予定されていましたが、開催できないため緊急避難策として全役員任期を1年間延長する提案を行い、書面で過半数の会員の賛同をいただきました。

世間では徐々にWeb会議が広まり、京都府医師会の各種会議にもWebEXが導入されました。糖尿病医会でもWebを活用したいと考え、府医が利用しているサポート業者を紹介していただきました。見積もりでは1回の学術講演会でサポート料が20数万円と大きな出費でしたが、まずは一度お願いしてWeb会議のノウハウを学ぶことにし、2020年12月にはWebで学術講演会を開催しました。これなら自力でも対応できそうだと感じ、2021年3月には恒例の地域学習会をZOOMで自力開催しました。それ以降2024年までは、学術講演会を含むほぼすべての行事をWebまたはハイブリッド形式で開催しました。毎回「業者の力を借りずに手作りで開催していますので多少の不手際があってもご容赦ください」と言い訳しながらでしたが、幸い大きなトラブルはなくコロナ禍を乗り切れたと思います。

しかし振り返れば、コロナ禍への対応に追われる中で様々なことが停滞していました。設立時に熱い思いを持って参加された先生方がご高齢となり、当時の記憶や熱気が徐々に薄れる中で、アクティビティやモチベーションを維持し続ける難しさを実感していましたが、対

面会議の激減は、その点でも大きな逆風となりました。

こうした状況の中で、設立時のように「熱心な先生の献身的な貢献」に頼る形では今後の運営が難しいと感じ、府立医大の福井教授にご相談申し上げ、医会の事務局業務を府立医大の医局で引き受けていただけることになりました。快くお引き受けくださった福井教授、実務を担ってくださる府立医大の医局員の先生方や秘書の皆様には心より感謝申し上げます。

昨年からは長谷川剛二先生に会長を引き継いでいただき、医会に新しい風を感じております。長谷川会長のご指導のもと、京都糖尿病医会がますます発展することを祈念するとともに、私自身もさらに貢献できるよう精進してまいりたいと思います。

京都糖尿病医会 20 周年に思う～あの頃、そして現在～

京都新町病院院長 長谷川剛二

京都糖尿病医会が発足したのは 2002 年 4 月頃ではなかったでしょうか。当時、設立にご尽力された先輩方の姿を思い浮かべるたびに、その熱意と行動力に深い敬意を抱かずにはいられません。その一方で、当時の私は何をしていたのだろうかと思ひ返すことがあります。卒業後 19 年目、学外勤務から府立医大に戻って 3 年目の頃でした。医局の体制は、いわゆるナンバー内科からディビジョン制へと移行しつつあり、研修医制度の改革も始まろうとしていました。日々の業務に追われていた私は、正直なところ京都糖尿病医会について深く考える余裕を持つことはできませんでした。ただ一つ、京都糖尿病医会が大学を頼らず、開業医や勤務医の先生方を中心に運営されるという話を耳にしたときには、大変印象的だと感じたことを覚えています。大学主導ではなく、地域の糖尿病医療に取り組むその姿勢は、当時の私にとって新鮮であり、興味深いものでした。

私自身が京都糖尿病医会の運営に関わるようになったのは、2014 年 4 月に京都第二日赤に勤務することになってからでした。それ以降、和田会長から鍵本会長の時代にかけて、副会長として役員会に出席させていただく立場になりました。しかし、振り返ってみると、役割に十分応えることができず、ただ名前だけが肩書きに残る状態でありました。この点については、不甲斐なく、反省の日々であり、「65 歳になったら解放される」と安易に思っていました。しかし、何と…2024 年 6 月に 65 歳で会長にご指名いただきました。

正確には、京都糖尿病医会は設立 23 年を迎えます。この間、医療の進歩やそれを取り巻く環境の変化は目覚ましいものがあり、それを無視することはできません。現在の糖尿病医会の会員名簿を拝見すると、そうした変化を改めて実感します。特に、設立当初から在籍さ

れている会員の中に多くの糖尿病非専門医の先生方がいらっしゃる事が印象的です。設立当時、京都における糖尿病診療のレベル向上を目指し、熱意を持って活動された先輩方、そしてその趣旨に賛同し参加された非専門医の先生方の意識の高さには深い感銘を受けます。このような取り組みを内科ディビジョン化・専門医制度が根付いた現在に同じ形で実現することは、非常に困難だと感じます。京都糖尿病医会は、糖尿病専門医が中心となり京都府医師会の分科会として、保険診療の枠組みの中でより良い医療の提供を目指し、地域における糖尿病医療のレベル向上に貢献する団体へと変化を遂げてきました。京都の糖尿病医療に長年貢献されてきた諸先輩方のDNAを受け継ぎながら、守るべきものは守り、さらなる発展を目指し、持続可能な糖尿病医会を築き上げることを心より願っております。

京都糖尿病医会とともに 20 年

京都大学 名誉教授、公益財団法人田附興風会 医学研究所北野病院 理事長

稲垣暢也

この度は京都糖尿病医会設立 20 周年、誠におめでとうございます。

私が京都大学大学院医学研究科の教授に着任したのは 2005 年 4 月ですので、それからちょうど 20 年になります。京都大学大学院を修了してから、千葉大学、そして秋田大学と、基礎医学の教室におりましたので、13 年ぶりに京都の、しかも臨床の教室に戻ることになり、右も左も分からず不安なことばかりでした。そのような時に、京都糖尿病医会会長の土井邦紘先生、同事務局の和田成雄先生や京都府立医科大学の中村直登先生には大変優しくしていただき、京都府の糖尿病医の先生方に受け入れていただいたことは今から考えても本当に有難いことでした。

私が着任した時は、我が国において日本糖尿病対策推進会議が発足した直後であり、その後世界糖尿病デーが設定されるなど、糖尿病対策が大いに盛り上がった時期でもありました。そこで早速、土井先生、和田先生、中村先生にお声がけし、2005 年 12



月には京都府糖尿病対策推進事業委員会が発足することになりました。その後、京都糖尿病医会の会長は和田先生、鍵本伸二先生、そして最近には長谷川剛二先生へと引き継がれ、京都府立医大の教授も中村先生から福井道明先生へと引き継がれましたが、医会ならびに京都

府立医大の皆様にはいつも変わらず優しくしていただき、楽しい時間を共有させていただきました（写真は和田成雄先生の古希のお祝いの会の時のものです）。おかげさまで、2023年6月までの17年余りの間、京都府糖尿病対策推進事業委員会の委員長を務めさせていただきました。ここに改めて深く感謝申し上げます。

私自身は、2022年9月に京都大学を退職し、現在は大阪の医学研究所北野病院で勤務しておりますが、これからも医会の皆様と共に糖尿病対策活動に少しでも貢献できるよう努めてまいりますので、引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、京都糖尿病医会の益々のご発展を祈念申し上げます。

京都糖尿病医会 20 周年に寄せて

大石内科クリニック 大石まり子

京都糖尿病医会は、2001年に土井会長のもと設立されました。設立当初から、地域の糖尿病診療レベルの向上と、非専門の先生方への情報提供を目的として活動を続けてきました。本会がこの20年間で果たしてきた役割は大きく、地域医療の発展に大きく貢献してきたと感じています。

私は1999年に開業し、それまで勤務していた病院を離れることになりました。そのため、病院内での交流がなくなった一方で、京都糖尿病医会を通じて、より広い地域の糖尿病専門医や開業医の先生方とのつながりを持つことができました。特に、糖尿病に限らず、関連する多くの診療科の先生方とも知り合うことができたことは、私にとって大きな財産となりました。

本会の活動の一つとして、京都府をいくつかの地域に分けて開催された地域勉強会があります。私自身、当初はこの勉強会を運営することに対してハードルの高さを感じていました。しかし、地域の医師会や先生方のご協力を得て、現在も継続することができています。こうした勉強会は、地域の中核病院と地元の開業医の先生方との連携を強化する役割を果たしており、地域医療の発展に大いに寄与していると感じています。

本会主催の研究会の特徴として、スポンサーをつけずに開催される点が挙げられます。そのため、関係者が忌憚なく本音で議論できる貴重な場となっています。研究会の担当をされた先生方には、講師の先生との連絡や交渉などで多くのご負担をおかけしましたが、その努力が本会への信頼を高める一助になったのではないかと思います。

私自身は設立当初から会計係を務めさせていただき、会の運営に携わってきました。本会

は、多くの先生方が気軽に参加できるよう、会費を低く設定しています。しかし、活動を続けるためには相応の資金が必要であり、そのため本会の趣旨に賛同してくださる製薬会社から寄付をいただけてきました。設立当初は多くの企業にご協力をいただきましたが、時代の流れとともに寄付の額も減少傾向にあり、今後の運営に影響が出るのではないかと危惧しています。

とはいえ、最近では遠方から講師を招く機会が減り、地元の先生方の登壇が増えてきました。加えて、リモート開催の普及もあり、若い先生方が創意工夫を凝らしながら会の運営を担ってくださる姿には敬意を表したいと思います。

20年間にわたり、地域の糖尿病医療の発展に貢献してきた京都糖尿病医会の役割は計り知れません。これまでの積み重ねがあるからこそ、今後も時代の変化に対応しながら、地域とともに発展し続けることを期待しています。

つながりを感じて

京都医療センター 小倉雅仁

皆様、平素より大変お世話になっております。京都医療センターの小倉雅仁でございます。自分が京都糖尿病医会に入会する契機となりましたのは、2017年3月の左京区での地域学習会に際して、当時の鍵本伸一会長からお声がけを頂き、いはら内科クリニックの井原裕先生のご指導の下で関わらせて頂いたことでした。当時は京都大学の糖尿病・内分泌・栄養内科で勤務しておりましたが、2023年4月に現在の職場に着任いたしまして、現在に至っております。

京都糖尿病医会に入会させて頂き感じましたことは、出身医局、開業医か病院勤務かなどの勤務形態の違い、卒業年次、ともすると専門性の垣根も越えて、つながっているということです。コロナ禍においては他の医療機関との直接交流がなかなか難しい時期もありましたが、その時にも京都糖尿病医会は比較的早くにWebを用いた「つながり」があったように思います。学術講演会をWebで行おう！という掛け声の上がった2020年12月、たまたま自分がその順番にあたっており、そうですね頑張ります！！と返事は勢い良くしてみたものの、当時は製薬会社のWeb講演会もようやく行われるようになってきたころでございまして、鍵本先生に多大なるご尽力を頂いてはいたものの、自分が粗相なく無事にZoomで学術講演会を成立させられるかヒヤヒヤしたことはございましたが。

京都糖尿病医会で偉大な諸先輩方の背中を見ておりますせいか、自分はまだ若手だという印象が強く、実際に若輩者であることは間違いないのですが、肩書もついてきた影響か、このところ「もう若手ではないですよ」という視線を感じることもままあります。自分が精進するのは当然としまして、京都糖尿病医会の活動がこれからも長く続いていくため、より若

い世代の入会を積極的に進めて参りたいと考えております。

今後ともご指導の程をどうぞよろしくお願い申し上げます。

京都糖尿病医会設立 20 周年を記念して

医療法人社団啓政会梶山内科クリニック 梶山静夫

京都糖尿病医会が設立 20 周年を迎えるにあたりまして一言お祝いを申し上げます。

京都糖尿病医会が設立されたのは 2001 年ですが、当時は京都市立病院の糖尿病・代謝内科部長をしておりました。糖尿病治療をしながら、医師だけでなく看護師・管理栄養士・保健師を含めたグループ医療の必要性を痛感しておりました。葛谷先生・大石先生・和田先生等と総合医療を目指して研究会を立ち上げていました。その頃に土井先生から京都糖尿病医会を作りたいという話があり、上司の金綱先生・中埜先生に相談したところ応援するように指示があり設立時より理事としてお手伝いをしました。

糖尿病医会の一員としてスタッフの指導・教育に当たりました。市立病院勤務時から支払基金の審査員をしておりましたので、2004 年に開業してからは糖尿病医会の代表として継続して審査員を務め、長谷川先生と交代するまで毎月医会の役員会に出席し診療報酬の情報を先生方にお伝えしてきました。

開業する前から日本糖尿病学会の栄養指導に疑問を持ち、もっと簡単な方法で出来ないものかと研究してまいりましたが、開業後、京都女子大学の今井佐恵子教授と共同研究するようになり業績を挙げることができました。食べる順番を工夫すること（食べる順番療法・野菜ファースト・ベジファースト）で食後の血糖値上昇を抑制することが証明されました。論文・著書をたくさん作成しテレビ（NHK：「ためしてガッテン」・「ガッテン！」、TBS：「とくダネ！」、テレビ東京等）や新聞（日経新聞等）で紹介されましたが、地元の京都新聞は記事にしてもらえませんでした。その時京都新聞から糖尿病医会に糖尿病についての連載記事の掲載依頼があり、土井先生から食事療法について執筆するように指示がありましたので、

食べる順番療法について掲載していただきました。

現在はクリニックの診療に専念しており医会のお手伝いは出来ませんが、京都糖尿病医会の益々の発展を祈念しております。

京都糖尿病医会 (Kyoto Diabetes Society) の思い出

淡海医療センター 先進医療センター／糖尿病内科・内分泌内科

島津 章

小生は、2000年(平成12年)3月京都大学大学院医学研究科臨床生体統御医学講座臨床病態検査学分野の助教授を辞し、同年4月国立京都病院へ臨床研究部長として着任しました。国立京都病院では1978年(昭和53年)に臨床研究部が設置され、WHO糖尿病協力センターに認定され、糖尿病疫学調査を中心とする先輩諸先生方の研究活動が高く評価され、2003年(平成15年)10月国立病院機構京都医療センターに臨床研究センターが設置され、その初代センター長に就任いたしました。臨床研究センターは糖尿病・内分泌代謝疾患の専門研究施設として発足しましたが、国立病院機構の臨床研究体制再構築に伴い、2008年(平成20年)度から「内分泌代謝性疾患」にとどまらず、がん診療支援を含めた幅広い分野を研究の活動分野としており、糖尿病分野では葛谷英嗣元院長、服部正和元部長、河野茂夫室長、佐藤哲子部長、坂根直樹室長の皆様にご活躍いただきました。小生は2019年に京都医療センターを退職し、南草津にある淡海医療センター(旧草津総合病院)に勤務しています。

京都糖尿病医会は、京都府内の糖尿病診療を実践している医師により構成され、京都大学・京都府立医科大学の学閥の垣根を超え、製薬会社や試薬・機器メーカーからの影響を完全に排して、糖尿病診療の研鑽と有益な情報交換を行う非常にユニークな会であります。運営のため毎月1回役員会を定期開催して様々な議論を尽くしています。初代会長の土井邦紘先生、2代目会長の和田成雄先生、3代目会長の鍵本伸二先生、現会長の長谷川剛二先生のご指導により糖尿病医会が発展し続けていることに厚く感謝の意を表したいと思います。

役員的小伙伴们は、それぞれの分野を考慮し学術講演会を分担しておりました。小生は、第

16回の京都糖尿病医会学術講演会(2009年(平成21年)12月開催)において「糖尿病と内分泌の接点」について話題提供いたしました。糖尿病の分類でその他の糖尿病に分類されている内分泌疾患に伴う糖尿病について解説し、①治癒可能な糖尿病・高血圧があること、②Common diseaseに潜む内分泌疾患に気づき、診断のポイントを抑えることの重要性をお話ししました。画像診断の普及に伴い、副腎偶発腫、サブクリニカルクッシング症候群の発見が増えており、糖尿病の約3%に発見される決してまれな疾患ではないことを示しました。

第19回の京都糖尿病医会学術講演会(2011年(平成23年)6月開催)では、京都消化器医会との共催により「非アルコール性脂肪肝(NAFLD)/脂肪肝炎(NASH)と糖尿病」をテーマとして小生が総合司会を受け持ちました。この分野の第一人者である大阪府済生会吹田病院の岡上武先生に特別講演をお願いし、糖尿病を含む代謝障害が脂肪肝、脂肪肝炎さらには肝細胞癌を引き起こす道筋を解説していただきました。現在は、NAFLDやNASHに含まれるAlcoholicやFattyの用語がスティグマを生む不適切用語であることから、代謝機能障害関連脂肪性肝疾患(Metabolic Dysfunction Associated Steatotic Liver Disease:MASLD)および代謝機能障害関連脂肪肝炎(Metabolic Dysfunction Associated Steatohepatitis:MASH)に名称変更されていることは皆さんご存じの通りです。B型およびC型ウイルス性肝炎は近い将来撲滅されますが、肝細胞癌を引き起こしうる糖尿病・肥満への対応が重要な課題となっています。

京都糖尿病医会の益々の発展を祈念する次第です。

京都糖尿病医会 20 周年おめでとうございます

高木循環器科診療所 高木 力

京都糖尿病医会の皆様、20 周年おめでとうございます。私は 2000 年 11 月に循環器科診療所を継承開業しました。初代会長の土井先生にお誘い頂き、初期から糖尿病医会に参加させて頂きました。当時の私は、前任地で行った研究から、「高インスリン血症患者説」信者でした。今でも、動脈硬化性心疾患を抑制するためには高インスリン血症を来さない糖尿病治療がよいと考えています。ですから、糖尿病医会の中では異端であったと思います。

私が糖尿病医会で最初に学び、影響を受けたことは、ビッグアナイド剤を積極的に使用するようになったことだと思います。私が研修医のころはビッグアナイド暗黒時代でした。循環器内科を専攻するようになると、冠動脈造影時のわずらわしさから、ビッグアナイドは使いづらい薬剤だと思っていました。当時の循環器内科では α GI や SU 剤が主流で、私のようなグリタゾン推進派が少し存在していたように思います。糖尿病医会の講習会などで実際にビッグアナイドを使用しておられる糖尿病専門医のお話を伺ったおかげで、私も積極的にビッグアナイドを使うようになりました。

昨今は SGLT2 阻害剤や GLP1 受容体作動薬が循環器領域で大躍進しています。特に SGLT2 阻害剤は心不全治療の第一選択となっている感があります。収縮能が保たれた心不全 (HFpEF) にはこれまで有効な治療法がありませんでしたが、ガイドラインに SGLT2 阻害剤の有用性が記載されて以降は、HFpEF 患者を早期に発見し、SGLT2 阻害剤で介入することがブームのようになっています。私もトレッドミル負荷心エコー図検査で HFpEF 患者を早期に発見することに努めてきたので、SGLT2 阻害剤という治療法を得たことはありがたいです。ただ、SGLT2 阻害剤がなぜ心不全抑制に効くのか、どのような患者に効く

のかなどまだまだ解明されるべき疑問があるように思います。HFpEF 患者には様々なフェノタイプがあると報告されており、すべてのタイプに SGLT2 阻害剤が効くのかはまだ答えが出ていないと思います。海外の HFpEF 患者は肥満が多く、日本人の高齢でやせた HFpEF 患者に本当に SGLT2 阻害剤が効くのか、注意が必要だと考えています。また、個人的に、HFpEF 患者に対して SGLT2 阻害剤を使用するときに注意すべき患者群があると感じています。それは高齢で、軽症の糖尿病を有する、ふくよかな女性の患者です。そのような患者に糖尿病治療目的ではなく、HFpEF 治療目的で SGLT2 阻害剤を投与すると、労作時呼吸困難は軽減し、NTproBNP 値も低下して HFpEF には効くのですが、過度の体重減少のために SGLT2 阻害剤中止を希望された方を連続 5 例経験しました。本当に風船がしぼむように痩せられるので、かつてに *shrinking lady phenomenon* と呼んでいます。男性ではまだ経験していません。

循環器内科医として、これからも糖尿病医会で学びたいと考えていますので、よろしくお願ひします。

感謝を込めて

ちかやま内科 近山達

長岡京市で内科・糖尿病内科で開業しております近山達と申します。

この度、京都糖尿病医会が設立 20 周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。また、20 周年記念誌の発刊に際し、投稿の機会を与えて頂いたことを大変恐縮に思います。私が寄稿の依頼をいただいたのは、2018 年 8 月から 2023 年 8 月までの 5 年間京都糖尿病医会の役員として会計を務めたことによるものと推察いたします。

私が京都糖尿病医会に入会した経緯については、2010 年に糖尿病専門医として済生会京都府病院（現在の京都済生会病院）に勤め始めた際に、私と同期である福井道明先生（現京都府立医科大学附属病院内分泌・糖尿病・代謝内科学教授）からの紹介で入会させて頂いたように記憶しております。

入会后、京都府保健事業協同組合の 7 階で行われていた役員会にも一般会員として何度か参加させて頂きましたが、開業に向けての準備に追われるようになってからは出席しなくなり、2016 年の開業後には糖尿病医会に入会していたことすら頭から抜けていましたが、2018 年 7 月に京都糖尿病医会の会計を務めておられた大石まり子先生から突然引継ぎのお電話をいただき、身が引き締まる思いで有難く会計の役を引き受けさせて頂きました。業務の引継ぎについては、大石まり子先生から直にお会いして会計の仕事について説明して頂いたり、丁寧なメールを送っていただいたおかげで滞りなく済み、引き継ぎ後も適時助言のメールを送ってくださり大変心強く思いました。

会計の仕事内容は、年 2 回ずつ開催される学術講演会と地域学習会で講演していただく講師への交通費、宿泊費などを含めた謝礼の金額を役員会で決めること、その謝礼金を講師に

支払うこと、京都糖尿病医会の会報のなどの印刷代、ホームページの維持費、府医師会の事務所賃料・専門医会担当事務への人件費、役員会に出席される先生方の交通費、事務局費等の支払いを行うこと、製薬会社から寄付金を募ること、監事の先生方に会計収支等についての承認を得ること、理事会および総会において会計収支と予算案についての報告を行うことなどですが、その中でも製薬会社からの寄付金については、私が会計を引き継いだ翌年から製薬会社が寄付金を控える動きが明確になり、寄付金申請のための書類をそろえたり、慣れないネットでの申請に苦労した割に、年々寄付金の総額が減っていったことで肩身の狭い思いもしましたが、鍵本先生をはじめ何人かの先生から“そういうご時世なので仕方がないです”と幾度か慰めの言葉を頂き、ご理解していただいたことは大変ありがたかったです。

また、年会費の徴収や府医師会からの交付金の申請手続き、会員リストの管理など面倒な業務を担っていただいた京都府医師会の専門医会担当事務の方々、会計監査で承認の印鑑を毎年快く押していただいた中井義勝先生、小出操子先生とその後任を引き受けていただいた原田範雄先生、大石まり子先生にも大変感謝致します。

2021年7月24日には京都糖尿病医会学術講演会の世話人を経験させていただきました。2020年6月27日に妊娠糖尿病をテーマに京都産婦人科医会との合同で行う予定が、新型コロナウイルスの感染拡大のため役員会で翌年への延期が決定され、講師の先生方や京都産婦人科医会との2度の日程調整にやや難渋したこと、京都府医師会館での会場参加とZoomによるWeb配信のハイブリッド方式という試みで演者の先生方と上手く繋がるかどうか講演会直前まで不安で緊張しましたが、演者を引き受けていただいた大阪母子医療センター母性内科主任部長の和栗雅子先生、愛媛大学大学院医学系研究科産婦人科学教授の杉山隆先生、京都産婦人科医会副会長の江川晴人先生、京都糖尿病医会会長の鍵本伸二先生、事務局の原山拓哉先生その他多くの先生方のご協力のおかげで、無事学術講演会が開催できました。

京都糖尿病医会の会計については時代の流れで、今後も製薬会社からの寄付金のさらなる減額が予想されることや、京都糖尿病医会を退会される先生方が増える傾向にある中で年会費をどのようにして確保するのか、府医師会からの交付金は今後も受け続けられるのかなど様々な不安材料があり、製薬会社の共催なしに今までの形式で学術講演会、地域学習会をそれぞれ年2回ずつ継続していきけるのかは、今後の検討課題になってくるかと思えます。

私が会計を担当したことで、会長の鍵本先生、事務局を務めていただいた原山先生にはご負担をおかけし、大変申し訳なく思っておりますが、京都糖尿病医会を通じて貴重な経験をさせていただいたことや知識を身につけられたこと、多くの糖尿病専門医の先生方と顔見知りになれたことは、私にとって大きな財産となり心より感謝しております。

これからもたくさんの若手の先生方に入会して頂くなどして、京都糖尿病医会がさらなる発展を遂げることを心より祈念いたします。

地域医療と共に：京都糖尿病医会での経験

日本バプテスト病院 土居健太郎

京都糖尿病医会とのご縁は、今から約 20 年前、2004 年に榊田出先生のご推薦を受けて入会させていただいたことに始まります。この長い年月の中で培われた関係は、私にとって非常に貴重なものであり、多くの学びと喜びをもたらしてくれました。入会当初は、土井邦紘先生が会長を務められており、毎月行われる役員会は京都専売病院の会議室で開催されました。そこでの会合は常に活気に満ちており、糖尿病医療の現状の課題と未来について熱心に議論が交わされていたのを今でも鮮明に覚えています。

その後、会の舵取りは和田茂雄先生、鍵本伸二先生そして長谷川剛二先生へと引き継がれ、私は地域学習会や学術講演会の企画に携わる機会をいただきました。これらの活動を通じ、地域でご開業されている先生方や大学の専門の先生方と直接交流する機会を得たことで、様々な視点から糖尿病医療を考える貴重な経験を積むことができました。地域学習会では、山科区と左京区で開催させていただき、医療現場での実践的な知識を地域の先生方と共有する場として、大きな意義を持ちました。また、学術講演会では、最新の研究成果に触れることができ、自らの知識をアップデートする絶好の機会となりました。

京都糖尿病医会の一員として、これまで地域医療に微力ながら貢献できたことを大変光栄に思います。これもひとえに、多くの先生方のご指導があったからこそであり、心より感謝申し上げます。今後も、これまでの経験を活かしながら、更なる研鑽を積み、京都糖尿病医会とともに地域医療に貢献したいと思います。

末筆ながら、京都糖尿病医会の 20 周年という輝かしい節目を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。今後の益々のご発展を祈念いたします。

京都糖尿病医会 20 周年誌に寄せて

京都桂病院 糖尿病・内分泌内科 長嶋一昭

京都糖尿病医会 20 周年心よりお祝い申し上げます。私が京都糖尿病医会に入会する契機となりましたのは、2017 年 4 月に京都桂病院に着任した時で、着任直後、お声をかけていただきました。当時会長は鍵本先生がされていて、研究会は自前で行うとの姿勢を強く貫かれており、文字通り、自前で、会長自らが会場の機材のセッティングまでされていたのを後ろで見ていて毎回驚いていたという状況でした。当時、医会活動のことは全く分からず、ひたすら周りの先生方の様子を拝見している日々でした。糖尿病医会の役員会も、もともとは対面で月 1 回開催されておりましたが、コロナ禍で Web 形式となり、コロナ禍が収まった後も、その利便性が勝り現在も Web 形式での開催となっており、ゆっくりとではありますが医会の活動も時流にあわせて少しずつ形を変えていっていると感じております。AI の台頭や、社会の変化、時代の変化とともに世の中すべてのことはどんどん形が変わっていくものと思われませんが、糖尿病医会も形は進化し続けても設立時の偉大な先生方の理念は忘れずに堅持していければと思います。製薬メーカー主催・共催の研究会等で講演するとなればスライドの事前チェックは当たり前、文言修正や場合によってはスライドごと削除となる昨今、製薬メーカーに依存せず自前で講演会を行う、言うは易く行うは難しの姿勢は大変尊いものだと思います。今後も、長谷川会長および多くの先生方のもと、京都糖尿病医会が益々発展することを祈念申し上げますとともに、私自身も精進してまいりたいと思います。

京都糖尿病医会 20 周年おめでとうございます

洛和会本部参与 松村理司

京都糖尿病医会が 20 周年記念誌を発刊されるとの由、おめでとうございます。

私は、貴会発足の比較的早期の 2005 年に、第 7 回学術講演会で「糖尿病にまつわる救急疾患」と題する特別講演をさせていただきました。新医師臨床研修制度の開始と連動して、市立舞鶴市民病院から京都市山科区の洛和会音羽病院へ転任したのが 2004 年でしたので、その 1 年後になります。糖尿病の専門医でもなく、救急医療の専門医でもなかったのに、どうして招かれたのか、またどうしてこのような題目になったのか今でははっきりとは思い出せません。舞鶴時代から「大リーガー医」招聘プログラム」を主宰しておりましたので、いささか変わったそのプログラムの内容を展開しなければならなくなったのかもしれない。

その際の拙稿を探してみましたところ、残っておりました。今回はデジタルコンテンツでの発表と拝聞しましたので、以下に URL を記させていただきます。すでに 20 年前のジェネラリストの試みですので、古く、もちろん中身もたいしたことはありませんので、御容赦を。

https://1drv.ms/b/c/dda3f8f9522c4be3/ES_A7O-C4JBDstscPfY1-bkBDELR2efwaVvOAdM2ONNi0g?e=zXqHvg

<https://1drv.ms/b/c/dda3f8f9522c4be3/EYAhqahPD0BFq5Eb9xafjccBCXMTNvEQFaasarHtyQC6g?e=iXb6dE>

さてその「大リーガー医」招聘プログラム」ですが、音羽病院でもコロナ禍までは、細々とではあれ継続してきました。“大リーガー医”とは、臨床訓練を米国で受けた医師の中で、臨床や訓練に秀でている姿が「メジャ級」の方々を指します。アカデミックな一般内科医・ホスピタリスト（病院総合医）が大半でした。彼・彼女たちは、Clinician-educator のロー

ルモデルであり、診断推論の水準が高く、治療の EBM を確立させており、検査・治療の効率に敏感である、というのが選抜の前提です。

米国臨床医学の峰々の多くは燦然と輝いていると私たちは考えてきました。そしてその裾野には、自由、とりわけ言論の自由が広がっているからだと信じてきました。1991年の舞鶴で、ロチェスター大学の William Hall 教授（老年学・呼吸器病学：2001年の米国内科学会会長）は、私に言いました。「フリーダムなのですよね、米国の価値は。いわばその価値を守るだけのために、他のあらゆる価値を犠牲にしているといってもいいくらいです。暴力、性の暴露・倒錯、家庭の崩壊、貧富の差、野望… 何でもありの国ですが、フリーダムを守る一点で結束しているわけです。私も、その一点を強く信じています」。小さな病院のこじんまりした食堂での先生の確たる発言は、今でも耳に残っています。

話をさらに広げます。現在の日本の「自由と民主主義」は、第二次世界大戦後に米国から教えられたものが骨格となっています。自然科学や医学の圧倒的な差も見せつけられました。だから、否が応にも日本国憲法とともに育った私のような団塊の世代には、米国は総体としてとても眩しいのです。

それなのに、米国のコロナ禍は感染者数も死者数も世界一でした。あのざまは一体何だと、失望を禁じ得ませんでした。安易な外国批判は避けたいのですが、それにしても、マスク装着を毛嫌いし、コロナ禍を軽視したトランプ元大統領の責任は重いでしょう。粗雑な自然科学観で公衆衛生的常道を無視し、世界に冠たる CDC や FDA に不当な圧力をかけました。さらには、一人一票の多数決民主主義に基づく大統領選の‘不正’を捏造し、SNS で大衆を煽り、議会へのデモ隊乱入につながったと私は考えています。

今回、民主的な選挙で再選されたトランプ大統領ですが、手当たり次第の「関税のかけまくり」だけが異様なものではありません。国是であるべき「表現の自由」の制限・圧殺がひど

なくなってきました。イスラエルのガザでの容赦ないパレスチナ人虐殺に反対する大学集会や抗議への参加者を、増長する「反ユダヤ主義」者として拘束するという政治的なものに留まらないと思われれます。名門大学への一連の助成金停止も、国是を揺るがせるものでしょう。毒牙はいずれ、学問一般、さらには科学や医学へも向けられてゆくでしょう。ついでに言いますと、ロバート・ケネディ・ジュニア氏の保健福祉長官への抜擢も、自然科学の中立性の観点からは、疑問紛々たるものです。

他国のことながら暗澹たる気持ちになります。そこで最後に嘘のような痛快な話を一つ。私淑した哲学者・評論家の故・鶴見俊輔氏（1922-2015年）の「獄中'ハーバード大学卒業記」。1942年、ハーバード大学哲学科に留学中の鶴見氏でしたが、日米大戦が起こり、収容所に入れられてしまいます。まだ3年生でしたが、それまでの抜群の好成績のおかげで何とか卒業証書もらえることになりました。しかし、その過程にはさまざまなごたごたが起こり、収容所側（国家）はハーバード大学にいろいろと難癖をつけました。その際のハーバード大学側の啖呵がすごいのです。「150年ほども後に生まれたくせに、ごちゃごちゃ言うな！」ハーバード大学設立1636年、アメリカ合衆国独立1776年です。国民国家以前に学問が発生したという、古くから西洋全体に通底する話なのですが、私たち日本人にはかなり異次元に響きますよね。しかし、ともあれ今後しばらくは、米国の学問の諸分野での「底力」が試され続けるに違いありません。法の正義とともに。

記載内容は何でもいいとありましたので、つい甘えてしまいました。御寛容のほどよろしくお願い致します。

「糖尿病は万病の元！」 京都糖尿病医会の向後なお一層の御発展をお祈り致します。

糖尿病を取り巻く環境の変化を感じた 20 年

京都第二赤十字病院 代謝・内分泌内科 山崎 真裕

京都糖尿病医会発足 20 周年ということでおめでとうございます。とともに立ち上げから関わられ継続し、ここまで大きく結束の強い会にされてきた諸先輩方のご努力に感謝いたします。

この 20 年は、僕にとっても糖尿病をもつ人にかかわるようになっての年数とほぼ同じで、糖尿病治療の大きな進歩、変革の時期と重なっていることを実感します。インスリンの超速効型、持効型の出現から週 1 回製剤まで、DPP-4 阻害薬によって低血糖を起こしにくい治療が可能となり、SGLT2 阻害薬で糖を尿に排泄させるという発想の大転換があり、GLP-1 受容体作動薬では今まで糖尿病をもつ人たちが苦しんできた食欲を抑え、体重まで落としてしまう。CGM で血糖変動が医療者だけでなく患者さん自身にも見えるようになり、インスリンポンプはいよいよ人工膵臓のレベルまで達しようとしている。医療者として糖尿病をもつ人たちのことを思えば思うほど、強く指導し我慢を強いるような治療法の説明しかできなかったうえに、「糖尿病になってしまった・・・」という後悔、反省、絶望を患者さん自身が感じていた時代は否が応でもスティグマが生まれたのかもしれないと感じます。

20 年間で我々糖尿病専門医も治療にあわせて自分自身を変え、糖尿病をもつ人への指導から支援に変わり、糖尿病をダイアベティスに変えようというスティグマは、今糖尿病をもつ人を診始めた若い医師たちには感じなくなってきました。逆に糖尿病があることによって保険診療内で血管合併症の発症、進行を予防する薬を合法的に使うことができ痩せて長生きできるかもしれない。もちろんそんなことで糖尿病をもったことを軽く感じるようなことはないのはわかっています。「10 年ひと昔」と言いますがふた昔前から続いてきた京都糖尿

病医会はこの変化を眺めながらも継続し大きくなってきました。この後の20年。糖尿病を取り巻く環境がどう変わるか予想はできませんが、今の糖尿病診療を目指す若い医師たちを取り込みうまく変化をしながらますます発展していけるよう祈念しますし、微力ながらも支えていければと思います。

京都糖尿病医会と私

龍谷大学 農学部 山本泰三

京都糖尿病医会の皆様、お久しぶりです。もしかすると初めましての先生もおられるかもしれないですが、ご容赦ください。

ちょうど21世紀の始まった2001年に糖尿病医会が設立されたのですね。私も京都桂病院在任中に初代会長の土井先生からお声がけをいただき、滋賀県立総合病院に2014年に移動になるまで、役員として楽しく活動させていただきました。2025年4月からは、定年後のセカンドキャリアとして、瀬田キャンパスの食品栄養学科で勤務しております。このような機会をいただけたのも、糖尿病医会を通じて、学術のみならず、地域の医療連携、チーム医療等にも関わる貴重な機会をいただけたことも大いに寄与していると思います。本当にありがとうございました。

糖尿病医会時代の楽しいエピソードをいくつかとりあげてみたいと思います。本会の立ち上げについては、やはり土井先生のリーダーシップと人脈とあくなき探求心が必要不可欠であったと思います。役員会でもあえて、オープクエッションの形で発言されることが多く、当時は若めの役員として自由に発言させてもらいました。年齢や所属は違ってもフェアに議論できるのはエキサイティングでしたし、講演会の企画、運営も目的を明確にしつつも自由にデザインして準備することで、参加者からも好評だったと記憶しております。私は、府医師会の学術委員にも、糖尿病医会代表として参加させていただきましたが、役員の先生方と情報共有を緊密に行うことで、その活性化にも貢献できたのではないかと考えています。糖尿病医会の講演会の後に講師の先生を囲んで、和田先生のなじみの店などでおいしいものを食べながら何度も楽しい語らいの時間がもてたことも、心に刻まれています。

自宅も滋賀県にあるため、2014年以降は糖尿病に関する活動がほぼ県内のみになってしまいました。学術講演会や糖尿病医会、糖尿病協会の活動も、どうしても同じ顔触れになり、ここ数年はCOVID-19の影響等で対面の会そのものも激減したのが残念でした。特に2020年の糖尿病学会は当初対面で滋賀県において開催されるはずだったのが、オンラインになってしまったのがいまだに残念で仕方がありません。

まだ新米教授ですが、少しでも早くなれて、あと3年間は卒業後も成長できる管理栄養士の育成に努めたいと思います。糖尿病医会の先生方が勤務されている施設での学生を受け入れていただいているケースも多いかと存じます。先月も実習先訪問で京大と京都市立病院を訪れましたが、かなり建物が入れ替わっているのを見ると時の流れを感じてしまいました。

フェイスブックでつながっている先生はご存じと思われそうですが、私はもともと里山や農作物や手工芸品などが大好きなので、今の環境がとても気に入っています。また直接お目にかかる機会があれば、いろいろお話しさせてください。

私の近況を記したHPとポートレートを添付しました。

龍谷大学 HP

<https://www.agr.ryukoku.ac.jp/teacher/yamamoto.html>

滋賀県立総合病院 HP

<https://www.pref.shiga.lg.jp/file/attachment/5324178.pdf>

<https://www.pref.shiga.lg.jp/file/attachment/5324179.pdf>



Chat GPT で作成

糖尿病医会の20年に関わらせていただいて。

よねだ内科クリニック 米田紘子

2008年京都大学糖尿病栄養内科から左京区の病院に赴任した際、初めて糖尿病医会地域学習会を開催することになりました。左京ではまだ一度も開催がなかったのですが、当時は京都大学内にも2つの糖尿病研究科がありました。また糖尿病医会の発足後の年数も浅かったため、地域学習会の意義についてご理解していただける開業医の先生が少なく、苦労した覚えがあります。医師会長にご相談に伺っても製薬会社がバックアップしない研究会に対する理解が難しく、なかなか首を縦に振っていただけなく悩みました。当時はまだ2つの伝統ある大学の共催も少なく、各地域での開催の意義についても理解の浸透が浅かった時代でした。そんな中、地域の開業医の先生で八田一郎先生、藤田宗先生の大変暖かいご支援で開催できたことは忘れもしません。

その後西京区、下京区の病院に異動し、各地域の医師会を経験して、最後にコロナ禍が明けて間もない時期に下京区で2度目の地域学習会を開催しました。京都市内でも地区により糖尿病診療に対する地域の先生方の受け止め方は違います。糖尿病治療も進歩し、治療薬も進歩し、京大と府立医大の連携も和やかで堅固なものとなり、着実に患者教育の意義についても理解が進んで他科の先生方の参加も増えました。

平成25年糖尿病医会の講演会の一環で、当時大ブームの幕開けとなった「糖質制限」をテーマにディベートを企画して司会をさせていただきました。糖質制限派と従来のバランスを重んじた食事療法派での討論会を京大芝蘭会館でしたのはとても思い出に残っています。病態栄養部の栄養指導を根底から覆しかねない糖質制限ブームで、糖質そのものが人体の敵と認識する風潮も次第に増大していました。糖質制限派には北里研究所の山田悟先生、従

来派には故津田謹輔先生にお願いしました。司会は福井先生に助けをいただき、活発なご意見が飛び交い意義ある会になりました。食事療法の内容は時代の流れと人類の進化で変化するのは当然ですが、そのエビデンスをとるには大変な作業であり、簡単には解決できないテーマではありますが、糖尿病学会で同様のデベートが企画されたよりずっと前に京都で企画できたのは京都糖尿病医会ならではのようです。患者さんは結果を直ぐ求め走る傾向がありますが、専門医会が正しい導きを示さないと何が王道か分からなくなってしまいます。専門医会の大事な役割であり、発信していかないといけないと感じました。



また京都府医師会の健康日本21委員会に糖尿病医会から委員を10年以上勤めました。「暮らしの健康展」の企画や年1度の市民公開健康講座の企画、講演をする機会をいただきました。糖尿病テーマでの講演や第3期の健康日本21の総括を委員で講演しました。糖尿病以外の市民に関心のあるテーマや政府や各自治体の健康増進への取り組みを知ることができました。半世紀続いた「暮らしの健康展」は京都市の財政難で簡単に終了となってしまいましたが、一般市民に正しい知識の普及や正しい治療法の普及に大きく役立ってきました。SNSの普及で年齢層別の普及方法については、コロナ禍を挟んで悩ましい問題でしたが、これも時代の進歩で今後も形を変えていくと思われま。

1年半前に開業させていただき、勤務医の時と違った世の中の流れに気付くようになりま

した。自由診療で本来の治療と異なる治療の氾濫に驚く毎日ですが、血糖や体重のみならず、健康の基準についても時代の流れと共に変化はしますが、糖尿病医会は製薬会社に遠慮することなく、正しく糖尿病治療の指針を発信していく役割があり、私も会を通して勉強させて頂きました。今後は若い先生方にも参加いただき、益々の発展を祈念致します。